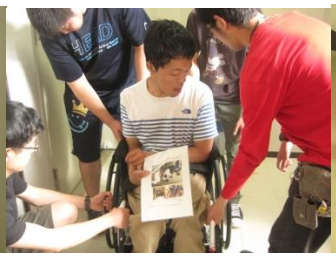
「しょうがい学生としょうがい学生支援サポーター
及びボランティアにおける防災訓練実施と個別避難計画の作成―講義編―」

日 時： 2018 年 6 月 25 日(月) 5 限　16：20～17：50
場 所：14 号館 1 階 1412 教室
講義内容
主旨説明：インクルーシブ学生支援センター長挨拶
タイトル：「自分の避難計画は自分で作ろう」　(担当：吉村千恵 氏)
　　：「個別避難計画を作成した経験から」(担当：昨年参加したしょうがい学生さんたちから各グループ内にて報告)
対 象 者：サポート利用学生およびサポーター・ボランティア学生、教職員
参加者：しょうがい学生 9 名　職員 5 名　教員 1 名　サポーター2 名　ボランティア 2 名
グループワークの様子

「しょうがい学生としょうがい学生支援サポーター及びボランティアにおける
防災訓練実施と個別避難計画の作成―実技・避難計画書作成編―」

日 時：6 月 27 日（水）9 時 00 分～17 時 50 分
場 所：117C・図書館 2 階 201 室
対 象：しょうがい学生支援サポーターとサポート利用学生及びボランティア、教職員
内 容：参加者：しょうがい学生 9 名　職員 4 名　教員 0 名　サポーター2 名　ボランティア 22 名

■班ごとの感想
【A 班】
・車いすを全部抱えて降りるのは負担がある。地面に後輪をつけて降りれると良い。
⇒地面に後輪がついていることは、当事者の人たちも安心。
改善点⇒おんぶは、背負ってくれる人と一体になるので、多くの指示を出さなくてもよく、混乱が少ない。車いすを先におろしてもらい、後から自分がおんぶをしてもらい降りて行く。



【B 班】

・司令塔の役割をしたが、持ってもらう人の力が人によって違いバランスがとれていないようで怖かった。

【C 班】

・周辺の状況や避難者(支援者含む)全体を見ることができる為、指示は最初に決められた指示者がすること。

・荷物が多いので最小限に必要な物は小さなバックに入れておき、避難する際の荷物はそれのみを持っていく。

【D 班】

・おんぶと担架で避難してみたが、担架の方がよかった。担架で移動する場合は、背中のたすきの位置が持つ人には重要なので、避難計画書には背中の面を載せておくとよい。

【E 班】

・担架と車いすで避難をした。車いすで避難する場合、女性が半分だと持ちにくく難しいと感じた。だが、担架であれば重さが分散されて車いすよりかは、きつくないという意見があった。

・布製の担架でもしっかりしていたことにびっくりした(本人談)。

・一緒に移動してくれる学生たちが声掛けをしてくれたことで安心感があった(本人談)。

・ボランティア学生からは、「運動部系の学生を頼るといい。責任感もわりかしある」とアドバイスをされていた。希望する避難方法としては、①は担架で②に車いすでの避難としたい。

【F 班】

・手すりを持って歩いて移動したいと本人からの希望あり。実際に降りてみると(7 階から 6 階)3 分程度で降りる

ことができた。だが、例えば 7 階から降りるのであれば 30 分はかかることになる。したがって、歩いて降りる階数は、本人及び同行する支援者のことも含み今後要検討。
・はじめて手動車いすで降りてみた。多少、揺れたが思ったほどではなく「これで助かればいいな」と思った。(本人談)

【G 班】
・速さより安全性を重視する。

【H 班】
・本人を抱えて降りることは不安だったが、思っていたより安定感があった。実際にやってみると、そこまでの恐怖心はなく実行できた。

【その他の感想】
・ボランティアメンバーで担架に乗った人⇒初めて担架に乗った。人はたくさんいた方が、抱えてもらった時に安定すると思った。身体が上か下かにずり落ちそうな感じがあった。
・ボランティアメンバーで担架を抱えた人⇒抱える前のイメージは「重い」と思っていたが、みんなで抱えると重くはなかった。ただ、降りやすさなどの効率を考えると 4 人がベストだと思った。また、息もあわせやすかった。後は、交代要員がいて先に降りた人が指示をしてくれるとスムーズに避難できると思った。
・降りる時は、慎重に移動する。早すぎず遅すぎず自分も相手に気遣い、「後、残り何段だよ」等、声をかけたりすること。
・車いすで後ろ向きに降りる時は、肩で担ぐ型もありだと思った。しかし、実際には手元がおぼつかず自分も怖かった。
・階段を歩いて降りるだけでも息があがった。日頃の運動不足を感じた。
・車いすで避難する際に、握ってもらう部分にマスキングテープで印をつけておくと分かりやすいし率先して協力したいと思う。
・非常時は、率先して避難に協力したいと思った。

・どうすれば、早く避難できるかをと思ったが「声掛け」は重要だと感じた。
・最初は、安全に避難することは難しいと考えたが、案外できるものだと思った。
・本人を抱えた時に密着していると安定感があると思った。

【吉村氏より】
・車いすで降りる場合、座位の保持が難しかったり、身体がずれる場合はより安全のために付属品であるベルトの購入を(個人)検討してもよいのではないか。
・車いすで持ってはいけない箇所には印をつけておく。(フットレスなど)
・避難の中心にいるのは当事者であるが、移動する際は必ず声掛けをすること。(階段を降りるさいの 1・2 などの声掛け)
・男性 2 人で車いすに座っている人を移動するには、いくら力があってもリスクがある。特に階段は傾斜も建物によって違いがある。リスクを分散させる為にも 4 人の方がよい。(人数が多すぎても身体があたって移動がしづらくなる)。
・個別の避難計画書は、必ず自分でも持っておくこと。
【総括】
　今回の避難訓練では、1 年生を除き 3 年生と 4 年生は昨年作成したものから新たな避難方法を経験し避難計画書に加筆、修正を行った。4 年生にとっては 4 度目の防災訓練だったこともあり、これまでの経験などをもとに新入生へアドバイスをする場面も見られた。1 年生は、本学でははじめての個別避難訓練となり、いくつもの避難方法の中から試行錯誤しながら選び実施したことで、自己のしょうがい特性を改めて知る機会となった。ボランティア学生も、個別のしょうがい状況に応じた避難方法が必要であることが分かり、しょうがい学生と支援者の双方が安全に避難できることを念頭に訓練が実施できた。これは有事の際の何よりの備えになると思う。また、吉村氏の提案でボランティア学生にも車いすや担架に乗ってもらい実際に階段を降りてもらった。しょうがい学生が避難をする時に、どのような不安を抱え身体を預けることになるのかを体験してもらいたかったからだ。ボランティア自身が経験することで声掛けによる安心感、その重要性を知り得ることができたと思われる。さらに、力がない人には指示や安全確認という役割があることも分かり、それぞれができる範囲で協力することが支援者であることを学んでもらえたと感じた。
　個別避難計画書の作成では、「しょうがい学生と支援者の双方が分かりやすいものであること」に視点を置き、グループ内で意見を交わしながら作成した避難計画書には、個々でいくつかの避難方法を提示することができた。今回は、しょうがい学生とボランティア全体で活発な議論、質疑応答も行いしょうがい学生の避難に関して理解の促進と学生間による協力関係の構築につながったのではないかと考える。

2018年度インクルーシブ学生支援センタープログラム

2018年3月12日

事業名称

しょうがい学生における避難訓練及び個別避難計画書作成

事業概要

全学的な支援の実施において大学全体における避難訓練は定期的に実施されているが、しょうがい学生においては身体状況の変化により避難訓練及び個別避難計画書の内容の検証を行い更新して作成することが必要な為。

事業目標

個別に沿った防災訓練を実施し周囲の方の協力を得て安全に避難できるかを検討した上で個別避難計画書を作成する。

【内容】

事業の必要性

しょうがい者が災害時に避難する際には、適切に自身の避難方法を伝える力を必要とする。災害時に、的確な判断に基づき自己の力で行動選択をし周囲の協力を得て安全に避難することが減災につながる。熊本地震の経験から個々の防災訓練や個別避難計画書は、日常的な備えとして必要不可欠なものであると考える。

見込まれる効果

しょうがいのある学生の身体状況は、個々に違いまた変化を伴う。したがって、個々の計画書を自身で作成できるようスキルを身につけることで、身体の変化に応じて内容を更新し個別避難計画書をたてることができるようになる。また、個別避難計画書は、日常的な備えとして持ち歩き、実際に災害が起き本人がパニックになった際に自分で説明ができない場合は、計画書に記載してある写真と説明書きを同行してほしい相手に見てもらうことで個別に沿った避難方法の一助になるであろう。

問題点課題等

避難訓練時は、グループで避難訓練の実施、個別避難計画書作成を行うが、しょうがい学生支援サポーターの参加、ボランティアの参加人数が乏しい。来年度は、夏休みに入る前に実施し、しょうがい学生支援サポーター、ボランティアの人員をできるだけ確保したい。

前年度からの改善点

平成28年度は、(科目名)「減災ソーシャルワーク」にてしょうがい学生支援室と共同で個別避難計画書を作成するに至っていたが、本年度は科目が終了したため外部から講師を招聘している。したがって、授業では数回に及ぶ避難訓練の実施をグループで行い修正しつつ計画書を作成していたが、スケジュールの関係から1日で避難訓練、個別避難計画書を、実施・修正を重ね最終版を作成している。

平成 30 年度避難訓練

課題

① 避難訓練実施に関するもの

・しょうがい学生の防災訓練への参加意識(車いす学生 11 名中、不参加 2 名)。

・教職員との連携(今年度は、学生課からの声かけで厚生委員会メンバーの協力有)。

② 個別避難に関するもの

・誰が見てもわかりやすい個別避難計画書の作成。

③ 大学で被災した際の現実に即した避難方法について

・学生が避難する際の支援者の確保(しょうがい学生 11 名)に対しての人員配置。また、肢体しょうがいのある学生以外のしょうがい学生への対応。

成果

① 避難訓練実施に関するもの

・多くのボランティアに参加してもらえたことで活発な議論ができた。

・個別避難計画書の作成の回数を重ねるごとにしょうがい学生の防災意識が向上した。

② 個別避難に関するもの

・車いすごとの避難、おんぶ、担架での避難と本人の身体状況および希望に応じた避難方法の経験により自身の身体状況に即した避難方法が分かったこと。

・車いすの構造を知った(避難する際にどこを持ってもらえばよいか分からなかったなど)。

・昨年（平成 29 年度）の避難訓練時とは異なる避難方法を自らで申し出て経験したこと。

③ 大学で被災した際に現実的な避難方法について

・しょうがい学生と支援者双方にとってできるだけ安全な避難方法を模索することができた。

平成 31 年度の避難訓練に向けて

・平成 30 年度と同様に、避難訓練・個別避難計画書作成は、しょうがい学生と支援者が震災時の危機管理について考え、個々に即した避難訓練を実施する機会である。しょうがい学生には継続して参加するよう促し、卒業後も身体状況に応じた個別避難計画書を自身で作成できるようにする。また、ボランティアで参加するしょうがいのない学生もしょうがい学生の避難方法を知ることで、災害弱者への理解が深まると思われる。しょうがい学生がどこで被災しても、本人が周囲の人へ避難方法を伝え避難できるようスキルアップを目指し、さらに身体しょうがいだけでなく発達しょうがいが重複している学生が入学してくることも踏まえ(パニックをおこす可能性あり)、教職員を含めた訓練ができるよう働きかけていきたい。